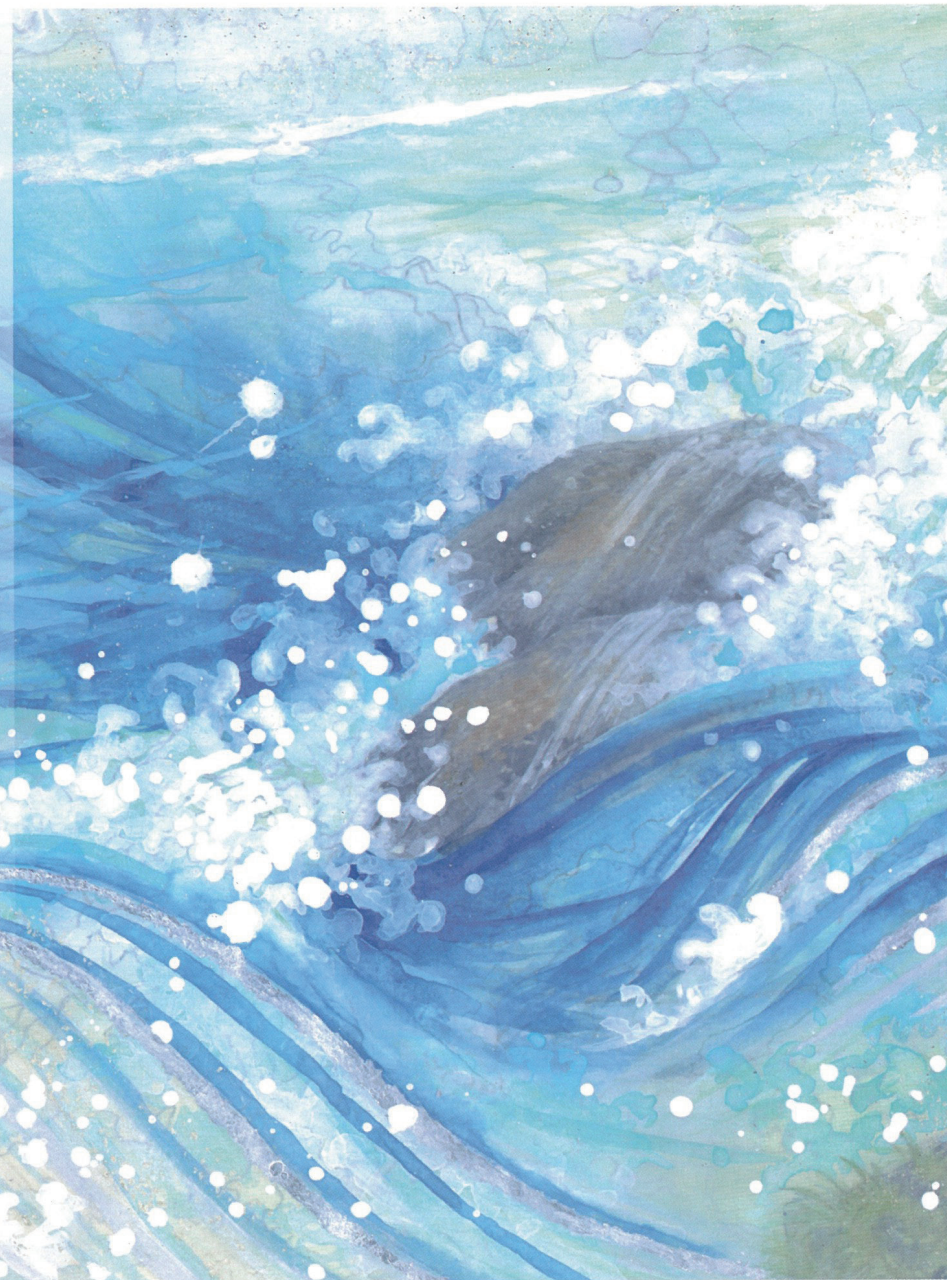




文化財保存修復情報誌

創刊号

みずのそと

人・モノ・自然の幸せな関係を考える

「伝える」仕事

文化財って何？
文化財の修復って何？
修復家インタビュー
家庭で行う保存と保管
専門家のお仕事

緒言

このたび、文化財の保存と修復を通して文化と自然の保護継承を目指す情報誌「みずのそと（水緒）」人・モノ・自然の幸せな関係を考える」を創刊いたしました。

人の生活・歴史の中で生み出された文化の所産は、私たちの身の回りを豊かに、楽しく、美しく彩ってくれます。人々の幸せを願って生まれ出てきた創造物は、「文化財」と呼ばれるモノも身近にあるモノたちも、大切な人間の伴走者です。ままならない自然の営みの中で、時に祈り、時に感謝をささげ、厳しい日常を少しでも豊かに美しくと手を動かしてきた先人の想いが、これらを通して伝わってきます。こうしたモノを生み出す知恵や技術は、遠い祖先が地域ごとの自然から学び、連綿と継承してきたものに他なりません。自然も地域固有の文化も失われつつある今日、文化の所産を修復し、残し、将来に伝えていこうというのが私たちNPO法人文化財保存支援機構の使命です。

小さな湧水が長い年月をかけて地下を伏流し、やがて一筋の川となって姿を現し、滔々と流れて暦日の記憶を伝えてくれる——「水緒（みずのそと）」とはそんな水の絶え間ない様を表します。絶えそうになる水の流れを「修復」し、未来へ「継承」するため、共に「みずのそと」の護り人となって頂ければ幸いです。

NPO法人文化財保存支援機構
(NPOJCP)



文化財の 修復って何？

「修復」って何を
「修理」とは違うの？
どうやって修復をして、
何に気を付けているのか
見てみましょう。

I 文化財って何？

- 04 文化財って何？
- 06 あなたにとって「文化財って何？」
- 10 文化財とは何か /三輪嘉六

II 文化財の修復って何？

- 14 文化財の修復って何？修復 before・After
- 17 修復倫理について
- 22 文化財修復に失敗はあるのか /土屋裕子

III 修復家インタビュー

- 26 文化財・美術保存修復士 /白井啓太
- 28 絵画修復家 /武田恵理
- 30 紙本修復家 /一宮佳世子

IV 家庭で行う保存と保管

- 32 家庭で行う保存と保管 やってはいけない
- 34 家庭で行うメンテナンス やってみよう
- 36 家庭で行う日常管理 掛軸を扱う
- 38 家庭で行う日常管理 保存箱に入れる
- 42 知っておこう 虫干し
- 44 文化財に使用できる防虫剤 /小峰幸夫

V 専門家のお仕事

- 46 西洋絵画の補彩について /鳥海秀実、伊藤由美
- 52 保険についてー「修理品預かり」の保険がなぜないの？/宮寄真人 インタビュアー：八木三香

VI 寄稿

- 54 食と器ー磁器と膾 /森由美
- 58 「伝える」ということについてー「跡継ぎ」を育てる /川口陽徳
- 66 エンタメと文化財ーエンターテインメントと文化財の交点とは？ /濱田織人

VII コラム

- 70 民俗学一ター話ー昔話は本当に「古い」のか /松田佳代
- 72 世界の手仕事ーナンタケットバスケット /八代江津子 インタビュアー：本葉梨絵
- 76 旅で出会った文化財ー英国の中の異国 /後閑亜有実
- 78 エッセイ 人とモノの幸せな関係ーMy Mother's Treasure /八木三香

VIII 情報コーナー

- 80 文化財に関する書籍
- 82 修復の材料と道具を見に行こう /小津和紙、マスミ東京、美篤堂 取材：齋藤久嗣
- 86 修復の材料と道具を見に行こうーオンラインショップを覗いてみよう

家庭で行う日常管理

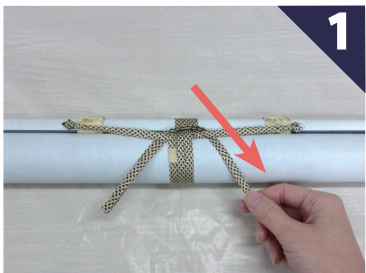
掛軸を扱う

ご家庭に様々な美術品をお持ちでも、どうやって取り扱ったらいいのかわからない、という方もいらっしゃるかもしれません。そこで、今回は掛軸の取り扱い方をご紹介しますと思います。

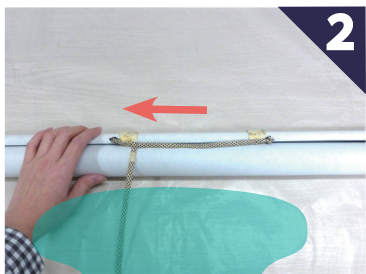
使用する道具



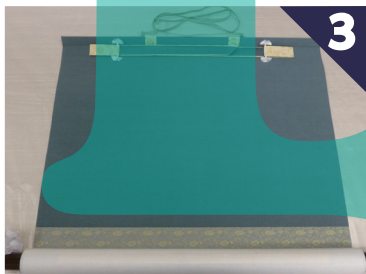
掛軸を飾る



巻緒の端を引いて、掛軸に巻いてあった紐をほどく。



巻緒を掛緒の端に寄せておく。



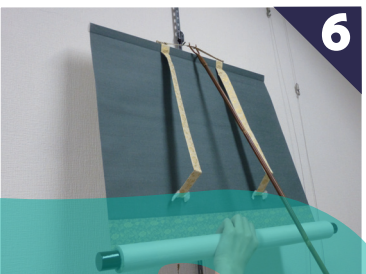
天が見えるまで軸を開く。



風袋を広げる。
※3・4 は机や床などの平らな場所に置いた状態で行う。



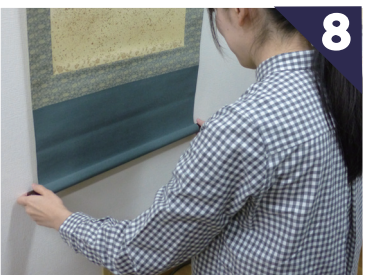
掛軸を片手で持ち、矢筈で掛緒の真ん中を引っ掛ける。



たるまないようにテンションをかけつつ、自在に掛緒を掛ける。
※掛緒の真ん中が自在にかかるようにすると、垂直に綺麗に掛かる。

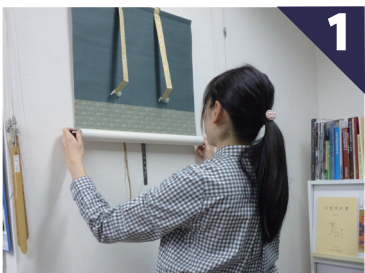


掛軸の両端（軸首）をもってゆっくりおろし開いていく。

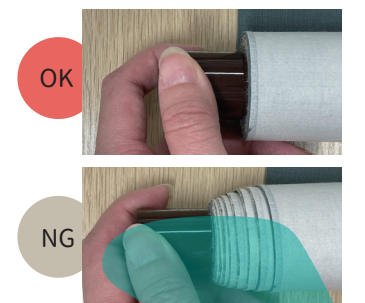


一度手を止めて床に膝をついてから、一番下までおろす。
※立ったまま下げていくと、頭突きをしまうので注意!!

掛軸をしまう



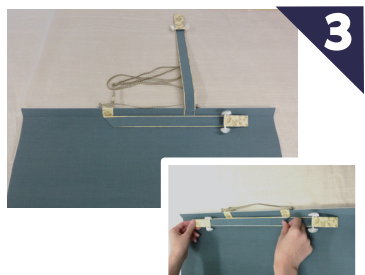
掛軸の両端をもって、ゆっくり巻き上げる。



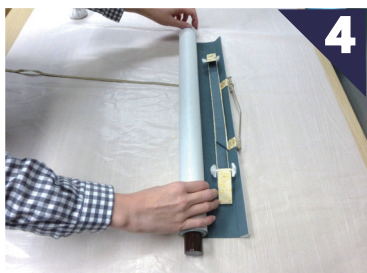
きつく巻きすぎたり、端がタケノコ状にならないように注意!!



風袋の下まで巻き上げたら、矢筈で掛緒をとり、自在から外す。



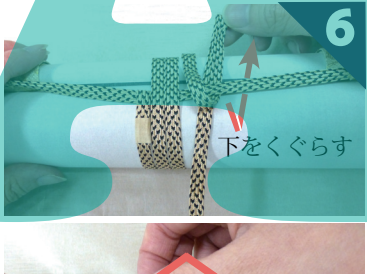
風袋を折りたたむ。
左が下になるように右を一度上にあげて、左からたたむ。



画面側が見えなくなるまで、最後まで軸を巻く。



巻緒を3周ほど軸に巻く。



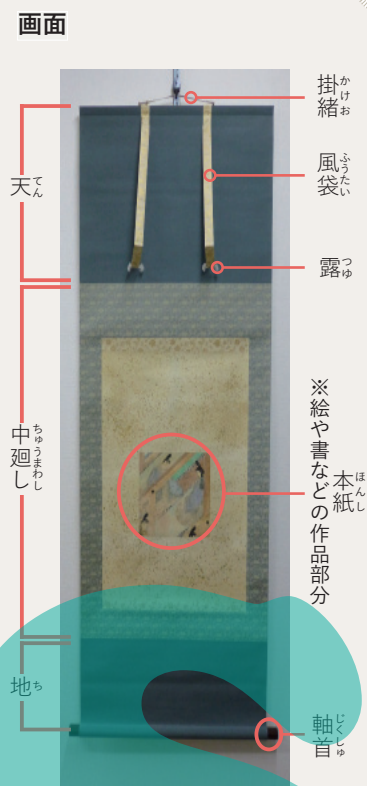
下をくぐらす
余った半分を、反対側にくぐらす



余った巻緒を、

掛緒に引っ掛けて留める。

掛軸の名称



飾る前に掛軸の損傷をチェック!!

- 紐類が切れていないか?
 - 虫に食われていないか?
 - 折れや破れている部分はないか?
 - 絵具が剥がれていないか?
 - 裂地に浮きはないか?
- 見つけたら保存環境をチェックし、修理を検討しましょう。

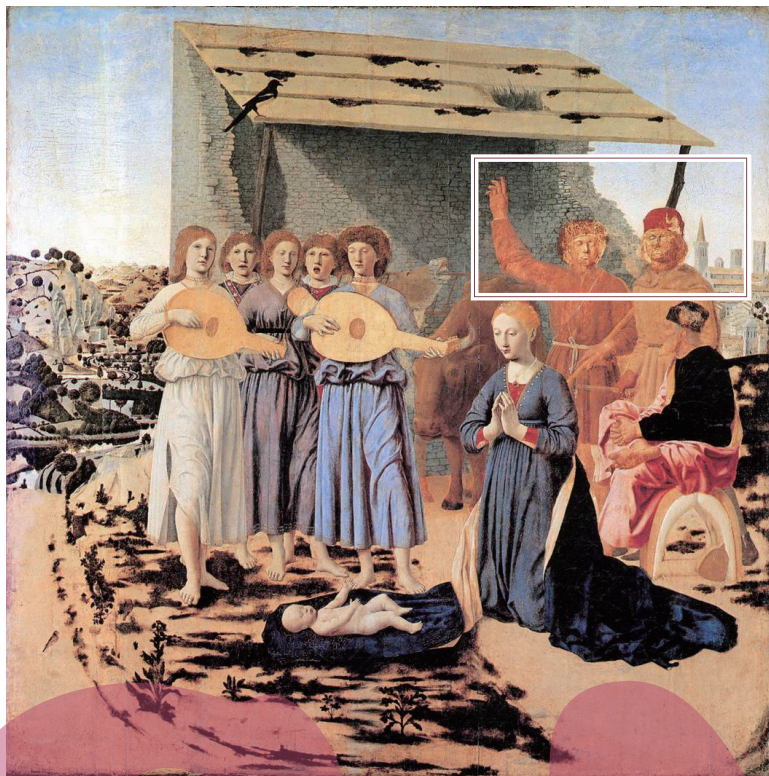


写真1) ピエロ・デッラ・フランチェスカ、《キリストの降誕》、ロンドン・ナショナル・ギャラリー、修復前 © National Gallery, London

補彩前



写真2) ピエロ・デッラ・フランチェスカ、《キリストの降誕》、修復前、部分

補彩後

補彩後は下記 URL のナショナルギャラリー HP よりご確認ください。

<https://www.nationalgallery.org.uk/paintings/piero-della-francesca-the-nativity>

西洋絵画の補彩について

補彩とは

鳥海 秀実

絵画が損傷すると、美的、歴史的、文化的、精神的な価値が損なわれる恐れがあります。作品に本来の姿を取り戻すため、修復では、構造を補強し表面には補彩を施すことが考えられます。補彩の種類は、オリジナルと見分けがつかない模倣的な補彩と、識別可能な補彩の大きく2つに分類できます。補彩を全く行わないこともまた、選択肢の一つです。作品のもつコンテクストを尊重して修復を行うためには、作品の状態や背景について十分に調査し、処置方法の特性を考えて方法を選択する必要があります。

日本の伝統的な掛軸や屏風などの装演修理では、欠損箇所の図像は復元せず、画面全体の基調色を施す地色補彩という方法が行われる一方、西洋絵画の場合は、欠損箇所を空白のままにしておくより、再構築を試みる傾向があると思います。西洋絵画の支持体の上には地塗りや幾層もの絵具層の重なりがあり、物質的に積み上げられた構造であること、そして三次元の立体的なモノの捉え方や空間表現がなされていることなどがその理由として考えられます。

西洋絵画の補彩

鳥海 秀実

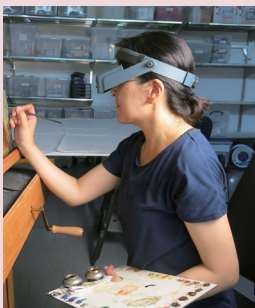
近年の西洋世界では、ロンドンのナショナル・ギャラリーで修復されたピエロ・デッラ・フランチェスカの作品《キリストの降誕》について、イギリスのガーディアン紙に批判が掲載され物議を醸しました「写真1」。とくに問題となったのは、画面に向かって右側に立つ2人の羊飼いの頭部でした「写真2」。2人の頭部のオリジナルは摩滅して損傷した状態でしたが、今回の修復で損傷の上に顔や髪が描き込まれています。

同じ西洋の中でも国や文化圏によって、修復の考え方には違いがあります。たとえば、イギリス（アングロ・サクソン系）のロンドン・ナショナル・ギャラリーでは、オリジナルでないものは除去し作品に欠損がないよう仕上げるのに対し、イタリア（ラテン系）では古色や後世の加筆などの歴史的な層にも配慮し、作品が経てきた時間の跡を残すクリーニングを行い、補彩は残

存するオリジナル部分が修復部分と識別できる方法で行う方針をとります。

修復方針の違いは、地域文化の違いによるところが大きいと思います。北方ヨーロッパの偶像崇拜を禁止するプロテスタントの地域では、聖堂の中に絵画がありませんが、中央・南ヨーロッパのカトリック聖堂の中はキリストなどの聖人を題材とした絵画や彫刻が溢れています。数百年もの間修復の手が入っていない作品が聖堂内に残されていることもあり、これらの作品を修復する際には作品が経た歴史の層の厚さを感じずにはいられません。しかし、国外に持ち出された絵画は、美術館に収蔵される前の売買の際に見栄えを整える修復がなされ、手荒なクリーニングや厚い補彩が行われることがしばしばありました。ロンドン・ナショナル・ギャラリーの《キリストの降誕》も、収蔵された時点で2人の羊飼いの頭部は損傷していたためオリジナルの状態を知るすべはありません。もしこの作品がイタリアに残されていたら、修復方針は異なっていたことでしょう。

補彩とは / 西洋絵画の補彩 / イタリアの補彩



絵画保存修復専門家 鳥海 秀実（とりうみ ひでみ）

東京藝術大学大学院文化財保存学修士課程修了。フィレンツェ大学専修課程、文化財保存科学修了。フィレンツェ国立修復機関 Opificio delle Pietre Dure にて研修。現在は、独立行政法人国立美術館、国立アートリサーチセンターの主任研究員。

チャーザレ・ブランディ『修復の理論』の翻訳者の一人（2005年）。ティナ・グレッタ・プールソン『修復は紡ぎ出す詩 紙に描かれた芸術作品の補彩』を監訳（2014年）。



りです。唯一、底板のあるバスケットというのが特徴です。これまでは、島で作られたものだけを「ナンタケットバスケット」と呼称していたのですが、2023年の夏に正統な製法をもって作られたものは、「ナンタケットバスケット」を称しても良いと認められました。この決定には、保守的な職人から反発を受けたりましたが、伝統を守り今後の発展を考える上ではノーチヨイスな判断であったとも考えられます。

八代さんがバスケットの存在を知ったのは、バカンスで島へ訪れた際に偶然目にしたウエディングでの一幕でした。花婿と手を組む花嫁のもう片方の腕には、美しい装飾が施されたバスケットが。目を奪われた瞬間からバスケットの虜となった彼女は、何かに突き動かされるかのごとく行動を起こします。異国の地で外国人である八代さんが「一子相伝」「門外不出」のバスケット制作を始めるには困難を極め、後の師匠となるアラン・リード氏からは冷遇され続けました。しかし、どんな状況でも彼女のパッションの火は消えることはなく、念願になって弟子入りを許された時には、初めて会った日から5年の歳月が経過していました。

「かご伝」を読んで、バスケット制作を始めるまでの道のりや、作家やお店の人の対応の冷たさに驚きました。普通であれば縁が無かったと諦めてしまおうと思うのですが、一体バスケットの何に魅了されたのでしょうか。

▼八代 一つは気品があり、緻密に作られていることです。二つ目は、技術を習得する内に女性が自活していく上でのツールになるのではないかと考えたことです。当時は女性が自立したいと思っても社会が許さない、そんな風潮がまだ残っていました。女性の自立を助けたと考え、制作メソッドをつくろうと決意したことも原動力の一つになったと思います。また、師匠から教わる中で、日本でも正統なバスケットを普及したいという気持ちが生じました。

島の中で八代さんが作られたようなメソッドを作ろうといった動きはなかったのでしょうか？

▼八代 全くありませんでした（笑）。伝統を守り一子相伝で伝えてきたことで技術が継承され、クオリティが担保される一方、職人の世界は閉鎖的になりがちです。島でもギルドを作ろうと声掛けはしましたが、個人主義の方が多いので首を縦にふる人は多くはいませんでした。技術が継承されず、廃れていっ

てしまうことも、どこか仕方ないと感じ入っていたのでしょうか？

▼八代 守りたいという気持ちは皆さんあるんです。しかし個人主義でそれぞれを尊重しすぎるが故に守る方法を知らない……という気がします。ヨーロッパは脈々と続く伝統がありますが、それに比べアメリカは伝統がほぼない国なので、そういったものを守る方法を会得していない国なのだと思います。

日本でもインストラクターを目指す方や作家さんもたくさんいると思いますが、材料の籐はどうしているのでしょうか？

▼八代 作家は材料を全て自分で作りますが、大型の機械が必要でそこから始める方はいません。全ての材



世界の手仕事

ナンタケットバスケット

アメリカ東海岸のケープゴット沖に浮かぶナンタケット島。かつて捕鯨によって栄えたその小さな島は、世界有数の高級別荘地として知られ、ハイシーズンにはたくさんの観光客でにぎわいます。

小豆島ほどの小さな島で生まれたナンタケットバスケットは、「世界で最も美しいかご」と称され、熟練された職人の手によって一つ一つ緻密に編み込まれた島の伝統工芸品です。ジャクリン・ケネディが愛用し、世界中の女性を魅了してきました。洗練された気品あふれるバスケットは、一人の日本人女性によって新たな変革を迎えます。

今回は、島の伝統と戦い、作家として、そしてバスケットを「伝えるもの」として継承する八代江津子さんにお話を伺いました。

海と伝統が培うかご

ナンタケットバスケットとは、どんなものなのでしょうか？

▼八代 ナンタケットバスケットは、島の捕鯨に関する歴史と密接に関わっています。ナンタケット島は18世紀中盤から19世紀前半にわたって世界一のシエラを誇る捕鯨の島として栄えました。現在の捕鯨方法が確立されたのはナンタケット島と言われています。捕鯨船の中には、とった鯨油を入れる樽を作る職人が乗船しており、航海の合間に編み始めたのがナンタケットバスケットの始ま

